丹鶴叢書

萬代和歌集 一

117
105
2

東京圖書館
和書門 類 函 架 號 冊
一〇五

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

丹鶴叢書　戊申帙

東京國立博物館圖書

故槻原芥塵納本

槻原家蔵

萬代和歌集巻第一

従五位下行土佐守源朝臣忠央輯刻

春歌上

三首のこころを　柿本人麻呂

はるとてつきいるつのまにまきの空よ霞もけふ

そとつきいるつのまにまきの空よ霞もけふ

春生忠見

喜ぶるつとはなをむのほいまのまと我やあらむと

兼屋二年内裏後番歌合よ喜ぶと

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

新千載　後京極殿
[illegible]

続後撰春上

[illegible]　前中納言匡房

[illegible]　[illegible]

新千載春上

[illegible]　源俊頼朝臣

続後拾遺春上

[illegible]　人丸

続後撰春上

[illegible]　鎌倉右大臣

続後拾遺春上

[illegible]　従二位家隆

続後　寛平后時きさいの宮の歌合のうた

[illegible]　曽根好忠

[illegible]　禖子内親王家美作

続後撰春上

[illegible]　洞院中宮哥合のうた

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

いつとく教ふるあのうしろ
早まきのこと　藤原伊家
春くれどうつもみおくいつくとまきの　二條太皇太后宮摂津
正治百首の春の
続後撰春上
ふるさのさまのまぬさそ　後京極摂政改太政大臣
後法性寺入道前関白右大臣
同春上
むさるこの元のの（本）　後法大僧正

続後撰春上
こそもる雲のそらさへ霞れて
洞院摂政の家百首よ春を

続古今雑上
志ゐさせ出てふことよりそ
延喜十四年女一宮屏風の
紀貫之

続後撰春上
山ふかみそこともさらぬ雪ゆゑに
入道前摂政攻大臣
百そのかに 哥一本
同春上
春もはやふもとの里の
一品資子内親王

あしのこもろをまもる人をみまくや
権中納言師俊
ふく風もまだしの宮このあさぢはら
前中納言定家
みちもなき雪の山ぢをわけそめて
新続古今春上
人丸
こゝろもとまるのこゑをたづぬれば
続古今春上 続古
源重之
まてしばし花やちるらん
同春上 続古
平時範朝臣

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

家もろこまるのこのまもせあそそそそる

源仲正

三輪の山すめくるのようこそあもをの彩のそしおうくそ

土御門内大臣

藤原隆信朝臣（保一本）

続古今春上

ゆうそそそまるそそまいそのみふる彩そそそそ神の彩杉

権中納言長方

橋上春と

沖津浪そそのほの夕雲あいそく（一本）浪名の橋もそそそ宮

百そのこのようせのひそまるふ雲と

土御門院御製

続後撰春上

伊勢の海やまの（の続後）

海辺の雪とふまをよみ侍る

（新同上）

法性寺入道前関白太政大臣

乱没そかそそまの彩そそそそ

後鳥羽院御歌合ふ霞隔を梅とみまを

前中納言定家

続古今春上

こ川没そそれ彩のれの彩そそ彩もそる

左京大夫顕家歌合ふ浦雪を

源忠季

指そのほそ物そそそめそそそのやもの雪なそそそ雪

霞隠松とらまさを　　藤原為真

春雨のふりしきぬれば立ち寄らん
　　般富門院大輔よりもおくる

おくあさの雨を詠めもふかぬのに
　　ぬるよしもなきとこと言ふらん

　　前中納言定家

秋ばらの指千のこやまもる
　　建保御製

連保にま院百そ小

ほのぼのとあけゆくみねのしらくもを
　　雲をも

まのこ舟のこの八十島かけて
　　入道前関白太政大臣

同題院歌合に春月を
　　侍従乳母

もろ人をおくる春を過ぐしつつ
　　法成寺入道前関白太政大臣

のどけさもまだ松ふかぬ霞かな
　　民部卿為文範

新続古今春上
二首
白河院の子日に
宇治へ前栽大切に
植ゑさせ給ひけるを
後拾遺賀
春日野もうゑやさまつ二葉より
君が千歳を松ぞ知るべき
春議資道
通證本
子日する松とを毎よりうゑそめて
末三葉迄四十年に及ぶ風情
玉葉賀
姫小松おほくなるまゝに
源道済
万代をちぎる玉
姫君の御代をかねて祝ふ
永保四年九月中宮
扶桑使宗俊

風
続後拾遺賀
君が代をちぎる姫小松
ねのびする野辺の若菜摘みてしが
もとめぬ人に袖ぬれけると
風雅春上
ふる雪に色もかをりも小雑
題しらず
平兼盛
ふるさとをそことも分ぬ雪の内に
元の内舎恒

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

続拾 こころもとなくも せさせたまふ

うかりつる身をのみこそは歎きしか
人をも世をも恨みざりきを

続後撰春上
雪あさきをやまぬやみぞはるかすむ
ふもとの里は春めきぬらん

前大納言忠良

続古今春上
なほ残る梅が香ながら袖ふれて
春の夜ふかき月ぞうつろふ

後鳥羽院御製

続拾遺春上
ながめやる袖まで匂ふ春風を
入道せぬ捨人もがな

前太政大臣

続後拾遺春上
いづくにか身をばすてつる世の中に
宿かりかぬる春の夕暮

寛喜女御入内屏風歌

西園寺入道前太政大臣

雪ふかきみ山のさとの朝ぼらけ
ゆきかふ人もあとたえにけり

続千載春上
ながめつる袖の雫か春雨に
花の香しめる夕暮の空

前太政大臣

続後拾遺春上
ながめやる霞の末を吹きとけて
春風ぞ渡る志賀の浦波

お中納言定家

続後拾遺春上
ながめやる霞の末に見えそめて
遠ざかりゆく志賀の浦波

従二位家隆

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

新続古今春上
春くれてそなたのふもとふく風に
霞しくらす

続千載春上
おほくさいまもの野ふすまろやと
も 続千
大中臣能宣朝臣

同春上
あくるよをまつとはなしに
源　順

風雅春上
めもはるにやなぎのとまくかよふらん
好忠百首ニ
なれてこそ

続後拾遺春上
来ぬ一本 続後拾
春ごとにもやどるもしるき
むめの ゝ 続後拾

清原深養父

建保四年院御百首

入道前関白太政大臣

続後撰春上
春くれば萩の焼原ふきわけて
春の野風に
若草の妻もこもれりわかなつむ
九条前太政大臣 太政一本

玉葉春上
里人やちりの橋ん新玉の
二條院三河内侍

霞しくらして
春とだにいまだ若葉の橘を
あやめぞかをる

後法大僧正

百首哥たてまつるとて

いさやまちてきゝえぬほとゝきす

後法興院前関白

後拾遺春上

ふるさとのまつにかよひてほとゝきす

三百六十首哥井序

好忠

後拾遺春上

ほとゝきすなくやさつきのあやめ草

新後古今春上

ほとゝきすなくや五月のあやめ草

順

後拾遺春上

ほとゝきすなくさつきのあやめ草

深養父

ほとゝきすなくさつきのあやめ草

肥後

ほとゝきすなくさつきのあやめ草

深養父女

ほとゝきすなくさつきのあやめ草

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

建保四年院御百首

春

続後撰春上
きのふこそ若菜をつみてしかのみもるのをはるのあけぼの

玉葉春上
はるかすみたつやいくへのやまかはをこえてきぬらんころもでの雪

続後撰春上
春のよのうらてれるつきかげをねぐらのとりもあやしとやみる

続後
雲井よりかすみたちそめてはるのよのつきのかつらもはるかなりけり

玉宝治二年百首

玉葉春上
はるきぬとかすみのうちはしらせどもなほ大納言のこゑ

続後撰春上
はるかぜのふくにしたがふ青柳のいとのみだれのたえまをぞおもふ

続古今春上
あすもまたこの川かぜやさえわたるいはこすなみのしもの玉だれ

仁和寺入道二品親王守覚家五十首に

後京極摂政前太政大臣

野もさはもたえだえ雪のしら波のかへるなごりにかすむ春かな

玉葉春上
はるかぜのふきとくれなゐのこほりとけてさざなみよする池の水

歌つかうまつりし次に

前中納言匡房

ふるのさとわかの花ざとやしるからむ赤染衛門

玉葉雜二
[illegible]

同春上
[illegible]

同春上
[illegible]

玉葉春上
[illegible]

[illegible]

[illegible]

玉 ㊀月ふきをみて
　そのゐるれいなるうた
　うたゝる

平兼盛

雪

(一本)
をたゝ山もとの梅花
ゝ
雪と
ゝ

藤原惟保朝臣 (雅一本)

花山院御集

友ありて
　雪ふる時と
　ゝ
　ゝ
　ゝ
　ゝ
　ゝ

藤原長実

玉葉雑一

うくひすのまつ
　ゝ
　ゝ
　ゝ
　ゝ

春情在鶯と云事を

前中納言定家　家隆一本

谷のあふ〳〵初音とゝもまつ人そこの中に

百そたの中に

玉葉春上後一条入道前関白左大臣

おなしくもまつ匂ふらん梅花と見ても

梅花と見ても

春くれはまつ鳥のねそとをきて

春くれはまつ鳥のおとも一本

もる歌仲に

道添

続千載春上

けさこそ我やとの梅のたちえの

我やとの梅のたちえの

後恵法師

続後拾遺雑上

うくひすの帰るく本末梅ちるを春や残るむ

四年続十

まき保内裏百番歌合

八条院六条

続千載春上

谷のふるすもとをうくひすの

谷のふるすもとをうくひす

仲教

続後撰春上

梅花ちるをみ匂へまきらふ風の

ち続後

一本下之伊勢哥在此歟

斯恒

あくぬともやまもとやまん梅もとの

あくぬともやまもとやまん梅もとの

源忠朝臣

まほろくなをや匂ふ梅花ちるをおしむる

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

続古今春上
題しらず
源信明朝臣

ふるさとの軒ばの梅も昔にて主ぞかはれる春の夜の月

玉葉春上
続古今春上
一本以哥在上之伊勢哥之次

伊勢

ふるさとへ花見にきてぞ梅が香も昔忘れぬ心地こそすれ

続古今雑上

馬内侍

やどりこし匂ひおぼえし梅もまた折しる人を待つ宵の雨

大僧都定基母

梅花ほころびそめし時よりぞ待しは春の匂ひなりける

百首歌の中に

弐子内親王

新続古今春上

なほもまた誰にかは見む古へのもとの主なき宿の梅ぞも

続拾遺春上

ありてのみうきよをしのぶ身ならねど昔ぞ恋しき宿の梅ぞも

続拾遺春上

建礼門院右大臣

ながらへて昔をいまも思ふかな垣根毒花といひけるも

太宰権帥経信

梅ぞ香は袖にうつりて匂ひける花の主やいづこなるらん

菅原輔昭

昔にて今もかはらぬ春の夜の月ばかりこそ形見なりけれ

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

千五百番歌合 宮内卿

玉葉春上
梅のその(を玉)ものあらし吹きぬ(も)れば
寛喜女御(元年 続古)入内屏風の
お太政大臣

続古今春上
匂ひくる(も)袖にぞ知らるあかつきの
天徳四年内裏歌合
中納言朝忠

玉葉春上
うちとけて梅が枝ながらうつしこし
風のこころにまかせやはせし
平兼盛

続古 宝治二年百首歌奉りし時

続古今春上(一本 ん同上)
うら宿に咲ける梅を月ごろ(うけう 続古)のみよの別れと思ひけるかな
人麻呂

兼久元年正月内裏歌合
薫原信実朝臣
散りぬとも香をだに残せ梅の花
春を待てとや鶯の鳴く
前太政大臣

続古今春上
たちさかの梅の立枝をうつしうゑて
匂ひのおそき春を恨みん
宮太后宮大夫俊女

ふるさと梅　旬
梅のさとはるかに風ぞ匂ひくる
　春の中
ふる里の梅　(二本)
ふる里の梅もたのめよ年ごとに
　かならずとまれ鶯の声
家の梅　(一本)
家ながら梅見るさとぞ遠くなる
　山路をこゆる人のこころは

続後撰春上
雪おもみわが宿の梅の枝ごとに
　花さきぬとや鶯のなく

続後拾春上
梅の花にほふあたりの夕月夜
　かすみをわけて鶯ぞなく

続古今春上
梅の花にほふ軒ばの夕月夜
　ふけゆくままに匂ふ袖かな

続後撰春上
梅の花にほふあたりの春の夜は
　闇こそ色の見えずなりけれ

続後撰春上
梅の花にほふ軒ば

玉葉春下 而

ふるさとの梅をほと人のとふらん（八玉）

大江嘉言

なつけるものゝまとふ折ふしも花のときゝゆる歌

玉葉春上

敷のうちをこの梅ふかせ帝（九玉）

民部卿長家

嶌をとゝめてこゝろ

続古今春上

仁和寺御製

梅花ゆきかとのみ人とけさ帝

続後拾遺春上

中納言家持

ちりぬ

一本

ちりぬともうめよ春なを梅の花

（七続後拾）

続古 更衣元年さ
とゝうまつりける日

続後拾 祺子内親王家哥合に寄梅月
とゝ

好名

ふるさとの衣手さむし風ふけば

寄梅月

梅の花月とをなせる夜のおぼろなるをもめでゝ

祺子内親王

春ごとにこのもとをとも来のみる

中務

（八一来 続後拾）

続後拾遺春下

春ごとの月をも人のみるやうに

小式部内侍

続後撰春下 郭公

見てもまたまたなつかなきまゝにまつ

宣旨

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

新続古 宝治百首家
まろ〳〵るふ
山階入道前左大臣

続古今 女院さうの
初りなてみやるとよめる侍
らさう〳〵五十首よませ
給ける日
天暦御哥

新続古今春上

詠ぬるよの秋なきそらをめぐるまの桜よ残る峰の
後京極摂政太政大臣

続古今恋三

秋ふまの人をもそらにまつ虫の
後京極摂政太政大臣

新続古今春上

詠ぬるよの秋なきそらをめぐるまの桜よ残る峰の
後京極摂政太政大臣

続古今春上

佐保姫の衣ふるみのの杜のよに霞ませとや春雨の
前中納言匡房

続後撰春上

春風をまちえてとくさくやどの青柳の糸

延長七年内裏御屏風のうた

貫之

春毎にたえずみどりの青柳の風をまつ糸ぞくる

忠見

春柳のいとをよりかけてくる人の月日をおるぞくるる

雨中柳といへることを

祐挙内記家證歌

春雨のふる神よりもいとどしくやれをよみ侍るの柳をつきそめけむ

太宰権帥経信

のどかなる風のどかにふる柳のあをくそまさるべくもあるかな

建保四年院御所にて

前中納言定家

あをやぎのいとの玉柳いろよりもふかきみどりの春雨ぞふる

入道二品親王道助家五十首の歌合に

岸柳

源家長朝臣

新続古今春上

立田川のこ岸の古やれさくらをまじへ柳をぞみる

（柳を諸本と一本）

いつもとも枝よりもろむ柳のおもかげ緑ふかき水

兼義その家三の合のうち
谷風のふくにまかせてちる玉梅枝のそ

春雨を　涼袋又

続後拾遺春上
そそぐやなくくそむらん咲まをそ

太宰大弐三宅
春雨のふるそめぬまに杉山のみとりもそまさりける

周防内侍

新千載雑上
そのあめよあかるやとのこまつ
まそ

女

ふるものとひさしくもるひさしの松をみとりの

ふるものとひさしくもるひさしの松をみとりの

新千載雑上
そのあめよあかるやとのこまつ

周防内侍

春雨のふるそめぬまに杉山のみとりもそまさりける

太宰大弐三宅
春雨を　涼袋又

続後拾遺春上
そそぐやなくくそむらん咲まをそ

兼義その家三の合のうち
谷風のふくにまかせてちる玉梅枝のそ

続古今雑上
春雨のまもる秋をみるものとてそ彩もぬるる袖うし

前大納言為家
おきそふるものとてもるはまもる雨を

権中納言長方
春雨のふるそめぬまに杉山のみとりもそまさりける

続後撰春中
日のそてに緑そまさるまそ雨のふるそのそのそ

雅経
雨ふりてくれゆく春のそらそおもかけにたつ

出羽
玉葉春上　廿四首
そまのそてもむすひつくしてその世のなこ緑そめまるし

まそ雨そ

後京極摂政前太政大臣

新十　宝治二年後嵯峨院御百首ノ内　花山院前内大臣

続後撰春上

ものゝ心を

百首歌たてまつりける時

春草

右近中将師俊（ひろ新十）

新十載雑上　ノ新十

春議経雲客ノ会

平

度多き

続後拾遺春上

笑ふのまとをおゆる

順

玉葉春上

百首歌よみ侍りける

和

早蕨をよめる

小

お

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

歳暮ふるさとの庵をおもひやりつつ
なほ百そとおとづれ
ぬ
惠慶法師

ふるさとの雪をも詠
ぬ
堀河院時
ふるさとも詠
ぬ
俊頼朝臣

もろ詠
ぬ
ふるさとを
ぬ
河内

みるもふるつつ詠
ぬ
ゆる年ぬ
ふるの
おのれ
ふるを
ぬ
権中納言師俊

まそなのもろ
ぬ
詠
ぬ
(八一本)
安
ぬ
帰
ぬ
後徳大寺左大臣

ふるさとの
ぬ
詠
ぬ
花山院御製

ふるさとの
ぬ
(八二本)
太宰権帥経信

玉葉春上
ふるさとといふことをよめる
ぬ
従二位家隆

続古今春上
ふる年にをそふることをよめる
ぬ

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

禖子内親王家歌

おくるのの旬ひやまさるらん

堀河院時の歌

堀河

かきるるもしらなるらるまでに

呼子鳥

権中納言

おほつまのふるさとゆかしほととぎす

右大臣

ふるさとを

ふるさとへ（続後拾遺）

前中納言匡房

朗詠のまつ四の山ともまつ一声を

禖子内親王

時鳥なくや五月のあやめ草

待もとしき事を

恵慶法師

ほとゝぎすまつ夜をいかにねよとてか

家の称

道済

ふる雨のさつきのそらもをしからし

鳥羽院御製

続古今集春上

ふるさとのまがきにさける八重桜ただひともとの春のあけぼの

後鳥羽院御製

続後撰春中

春ごとにこの宿ながめきたりしも花のもとにて三十とせまり

八條院高倉

玉葉春上

おもかげもむかしにあらぬ春ながらなれてもなほき花の色かな

前摂政左大臣家

続古今春上

ながめつつ思ふこころをしる人は花のほかにぞ友なかりける

藤原定家朝臣

続古今春上

花ざくらをりてかざせる人はみな千とせの春をかねてこそしれ

後鳥羽院御製

続古今春上

おもかげにたつ春霞かきわけて見ゆとはなしに恋ぞわびぬる

後頼政朝臣

続古今春上

おもふどちつれだつ春の花の宴はそのもの数ならねどもあかずぞありける

大納言為家

同春上

ながらへばまたこの比やしのばれむ憂しと見し世ぞ今は恋しき

和泉式部

天暦九年三月廿五日内裏歌合

ふるさとの花の盛りはいつもかくあはれ昔の春の夜の夢

御製

新千載春上

[illegible]

範長

[illegible]

同春上 [illegible] 新千 七日立

[illegible]

百[illegible]

[illegible]

続後撰春中 [illegible] 人続後 日四立

[illegible]

[illegible]

[illegible]

風 延喜十六年内
院屏風和人のもの
かきふ立てさせ給ふ時

あしのやをの稱ぞ風のとそのふもん

続千載春下 新続千
里ものゝやゆきてゐぬらんそらもうらゝのあ

玉葉春下 ことば二本
里ハこれをまてとやとりのこの稱かきさそふ風

延喜十八年斎院屏風のゝ

風雅春中
稱とゝふるとゝくもりのそらをとゝる

藤原経衡

ゆきもあもとゝをせきかねてうぐひすのこゑ

続千かのふるゝ
侍るゝ花下の月
後法性寺入道
前関白太政大臣

続後 新もしくへ
るまゝらを

続千載春下

花下の月といへる事を 中院入道右大臣

思ひ出もそとへよもなくてゆくはるをさ

春のゝ行末ハ 侍従惟明朝臣

玉葉春下 贈皇后宮

ちとをたゝならくにそまもるへき

二條院讃岐

続後拾遺春上

うつろふ花のいろをみ侍るに

もゝとまるへきまてとゝせをへぬる

新もしくを

入道前関白太政大臣

続後撰春中

ちの花ぬる新の風もんあへぬ

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

西園寺入道前太政大臣

春あまたへぬる

西園寺入道前太政大臣

春ごとに花のさかりはありなめどあかぬ色香は君にぞありける

権大納言公基

花ゆゑに心のみこそ浮れしか身をいたづらになしはてつとも

権大納言公基

春ごとに花のさかりはありなめどあかぬ色香は君にぞありける

前大納言為相

花ゆゑに心のみこそ浮れしか身をいたづらになしはてつとも

前大納言為相

春ごとに花のさかりはありなめどあかぬ色香は君にぞありける

続後撰春中

ことしより春知りそむる桜花ちるてふことはならはざらなん

新続古今春上　後京極摂政前太政大臣　一本ちる

花のえをたをるばかりにしるしあれや春をへだてぬ君がかざしと

十首歌よませ侍りける

後京極摂政前太政大臣

花ゆゑに心のみこそ浮れしか身をいたづらになしはてつとも

続拾遺春上

かすみこめ春の山もとうづむまで桜にかかる年をへぬとも

惠慶法師

ことしより春知りそむる桜花ちるてふことはならはざらなん

清原元輔

かすみこめ春の山もとうづむまで桜にかかる年をへぬとも

清原元輔

ことしより春知りそむる桜花ちるてふことはならはざらなん

赤染衛門

花ゆゑに心のみこそ浮れしか身をいたづらになしはてつとも

出羽掾

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

萬代和歌集巻第二

春歌下

題不知

按察使公任

続後撰春中

まつ人もこてやとらまし咲そめし花の心を春の事とは

日続後

太宰権師経輔

信ヒ

花自ㇾ情とうつまてを

松門老去のふるまひ

中納言定頼

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

久まつ百そうて

新千載春下
梓弓もものくちうつるとのそうたるまつ
花とよみ侍る
大伴家持
春雨のふる冬の梢とこうをうるうるそのあ
もものさのうちもうるうるそうたるまつ
みつつ一首
法印幸清
いかやうむうさもおさうれ梅ちるまつへてやみまし

風雅春中
うちうるもうつうまとうてやうむうるうるまつ
従二位頼政

新続古今春下
をうるやまの滝をまつ約るめてもうのこうのむとうるか
人丸

続後撰春中
まつまうさうまつみうつうまとうのをおさうたうけう
道潅

ううるもまうまとうとうさうもうくまうまかうかうかう
後頼孝
（一本ニ「倒イ」）
花のうつうく
前中納言定家
おまつ風ようさうまうまうんまむさんまうの梢ムーはううとうなうと

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

中納言兼輔

春下

春日

後拾遺春下

風従一位倫子春日

続古今春下

同上

玉 三条右大臣

玉 諸本 そイ

玉 諸本 と一本

玉 諸本 をゝゝゝゝて

玉 葉春下

風雅春上

やまさとに人のこころをしるものは
　山のもとそすくなき
　　馬内侍

もと一本
おもふことなくてそ梅もをらまし
　長治二年二月中宮女房
　うそ合
　　上総

なきそふるねまちつる山ほとゝきす
　堀川院御時百首
　　祐子内親王家紀伊

ヤイ諸本
たちかへるこゑもその里のほとゝきす
　なるゝもとをしをとをしとや
　　参議頼宣

続古今春下
新拾遺雑上
與風

風　延喜十四年女一宮屏風

続後拾遺春下

おもひもくまなき春の山桜
　兼房二年中殿御会
　　源政長朝臣

と続後拾
ふくかぜもをしとやおもふ山人の
　たてるかさゝもおもはすけ里
　　前関白

続古今春下
新拾遺雑上

をしなへてさかりの春の花のえを
　とゝめぬ風そうらめしきや
　　無風

も続古新拾
ちるをのみあはれとはいふ世の中に
　さかぬ花こそなくてうれしき
　　雲之

風雅春中
ふるさとの花をたづねてきてみれば
昔にかはる春の色かな

続後撰春中 忠見
をりをりに庭のさくらもさきぬれば
鳥羽殿御時毎朝見花といへる
心をよめる

同春中 続後一本
春ごとにたえずにほへる桜かな
嘉承二年同二月
十日
大蔵卿為房

かくれやむものもや匂ひそめんらむ
故郷花を

民部卿成範

続古今春下
ふるさとの花をむかしの人のみや
民部卿経房家の会に
よめる

前中納言資実

続後撰春中
いつのよのこころおきてか眺ふる
の続後
正治百首に

皇太后宮大夫俊成

同春中
名をうしと春よりほかの物ぞとて
山もと霞立ちかくすらん

新後撰春下
ふるさとの花のしがらみ春ごとに
桜をよみ侍りける

正三位季経

後撰春中
さくらのまてもとをみそめてもちこえ
皇太后宮大夫俊成の家の十そのうち
保イ諸本
花の中にて
よるなのをのくはなはをしまのさくらかな
後京極摂政前太政大臣
寛治五年家勝諸師坊にて会ふ
衣笠内大臣 家良一本
おなじ心を
白雲のさらぬ峯のこさくらはをしまれぬ人のこころか
遠見にもとのふもとを
後撰春中
よるなくはなをもみてまし
花をのみ中納言匡房

伊勢の屏風に
五百番歌合のために
藤原為家朝臣
さくらあさのかすみのまより
皇太后宮大夫俊成九十賀屏風に
前大納言公任
後撰春中
よるなくはなをもみてまし
花をのみ中納言匡房

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2　　ガラス使用

風雅春中
白雲のたえまをやいつかまつの花
七百首 七続後 三同上
七百首にて二月十七日
はるかぜにたぐふ
続後撰春下
こころへのこころをくさにそめなして
天徳四年内裏歌合
おもふことつゆもそむきを桜もも
尋ね花とりもを
拾大伝教慶
岑ふるさとさむしてきこもう
漆葉を入をお拾政家
家風の歌

続古今春上
いつとまつのこころもゆるさ
行人
かな
兼原長能 范一本
きるる人とまつや春雨一本
鈴木
兼原乾永
おもひつつみ
山も遠
兼原仲家
はる

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

西園寺ゝゝ花のゝゝとよゝゝる

前太政大臣

徒古今春下
そ徒古
そのさとの桜をよゝゝ詠つるゝゝゝ

風　寛治七年二月十日法輪寺の花下に後一条院の御時の事など人々に仰せられて聖武天皇御製

芳野山の花の枝ごとに春の神こそ小鳥と成りて鳴くらめ

聖武天皇御製

春の野に心のままに遊ぶ日は花も小鳥もともなはれつつ

風雅春中

白河院御製

こぬ人を待つとせしまに桜花おのれぞ咲きて散りにける

白河院御製

大宮の大臣

玉葉春下

まてといふ花ももみぢもとどめおきて誰にかあきの匂ひをも見む

大宮の大臣

後拾遺春上

後冷泉院の御時、花の比、殿上の人々あまた参りて、花の心を

中納言経季

花ゆゑに心のうちはいそがしき春の日ながきものとこそ知れ

兼保三年三月廿日、女房の中より

成永

花ゆゑに春の日ながくなりぬらし

後拾

後冷泉院の御時、歌合し侍りけるに、花の心を

堀河の左大臣

後拾遺春上

後冷泉院の御時、殿上の人々あまた参りて、花の心を

左大臣少方

長治二年三月中の申の日

民部卿忠教

続後 さくら散る春の夕々 延喜御製

続拾 見花日暮といへる心を

続古今雑上

伊勢

続後撰春中

寛平御製

世 続後

続拾遺春下

中納言兼輔

と 続拾

玉葉春下

新 続古

新続古今春下

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2　　ガラス使用

ふ雪をよめるのこゝろをゆみの日人まつ
ける

大弐三位

梓弓ひくまでしるき山ざとの
ふもと
ふもとのこゝろをいのおもひをむすびそめ

延喜御製

名ばかりの多武の峯ずりかけてだに
見ざる中の
おもつれなきものゝみやこ人
延喜十三年亭子院の
歌合の時

前大納言公良

梓弓いるまの山の桜花
ふもとのこゝろをいのおもひをむすびそめ

遍昭僧正

名にしおはゞいざ言問はむ都鳥
わが思ふ人はありやなしやと

伊勢一本

中務

続後撰春中

みてのこるこゝろあるかはさくらもむ
屋風

奥風

ちるものとこゝろえてこそ花の
花の盛りに都のそらを思ひやるらめ

花山院御製

あすのこと今日はかぎらぬ世の中を
見ぬ花の
春

玉葉春下

桜もるこゝろをみてぞ春風を又
おなじくは

大僧正公顕

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

風 永承五年内裏
院名所合

続十 くまもりの
さくらのもとにて
ふそくまもる

ふるさと荒廃の里のさくらもむかしをわすれぬ春の
ものかは

続後拾遺春下

さそはれてちりぬるものを山桜
花のこころをいかがとはまし

祐子内親王家宮合

風雅春中

さくらばなちりぬるかぜのなごりには
水なきそらの雪ぞしきける

続十載雑上

さくらかるこころのまゝにくまもれば
のちのしるしを人にみせばや

逐日看花といふことを

前大納言師右

玉葉春下

さくらもあるゝ旬になりぬれば花山院法皇

おほつかなよしのゝ里のあけぼのに
雪かとのみもまがふ花かな

百首歌中に

いつのまにちりはてぬらんさくらばな
雪ふるやどの春のあけぼの

(仁安二年)

前太政大臣

ちりぬるをしるもしるしな山桜
雪ふるやどの春のあけぼの

続後撰春中

(四年続後)

さくら又ちりはてぬとや吉野山
まだ深雪の今朝のあけぼの

二條院讃岐

続後撰春中
いつへのまてのつるくもりなく
按察使の任の人のもとにて桜のもとをよめる（ヲ新十）
せよ法こそ言はねど
よろこぶ（ヨ新十）
新千載春下
古へのものこゝろみてまゐらせよと
ありしに
花ゆへ風をうらむる九重のおほまへにて
祈恒
玉葉雑一
あやまりもものこゝろえてゆるされ
侍りしに（も諸本）
和泉式

続後撰雑上
そらもやのおやのいさめの給ふ
太上天皇西園寺前諸本
つゝまるゝ
土御門内大臣
おもひきや老木のさくらふたゝび
同春中
花ゆへ後世をねがふ
後京極摂政前太政大臣
月前述懐
ながらへて
後法興院内大臣
建保四年院寺
入道前按察使
続千載雑上
ものこゝろえ

続後撰春上
宝治元年二月前太政大臣西園寺の御幸ありて花ゆへ後世をねがふ日まゐりつかうまつりて侍りし後堀河院内大臣

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

花ぞともまたにほふのもとをおもふ（と諸本）　従二位家隆

おもひかくこしぢのたびの桜もむこころそらにみちやそふらん

毎年花をこふるとしを

前大僧正慈円

いそのかみふるきみやこのまもとかそまたみぬ八十日ありける

源俊法師

むさしのゝ草とやいはんおもふこのあはれをしれる（と諸本）　永源法師

まとゝくこゝろのまゝのものもさこのあはれをしれる（と諸本）

法をのぶることをうるもと　西園寺入道前太政大臣

法のさくらみさきのもゆるのあけがたもむ雲のたゝなはる事を

花無春　白氏文集

ふる郷の匂ふもとなる人ふたりことのまゝまつぐらん

妻の中にて

従部成茂

続古今神

桜もるうちもかすみもこゝろ神のいさめをうけて雲をわく

嘉保二年尚歯会のとき

高階経成朝臣

まつまちてやどりをうるもうれしさをたゝなはるもこゝろなるらん

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2　　ガラス使用

風　雨のうちうぐひすをきゝて

建保四年院御百首　西園寺入道前太政大臣

続後撰春下
詠むれば花もうぐひすうちとけて
ふるさと人の春ぞかすめる

続古今春下
散りぬとて花もうぐひすうちとけて
なげくこゝろもむすぼほれつゝ

続千載春下
春風の梢をいでてうぐひすの
雨中花とりどりを　中納言為家卿

風雅春下
ものうちもなきもこゝろぞ梅が香も
もるゝよをこそうぐひすぞなく

人丸

諸本　続古
立イ

続千
えくまもらん

続後撰春下
さゝなみの志賀のみやこもむかしにて
春情たのもとりもまず

人丸

橘俊綱朝臣

春なのかをりはの梅も花なれや
清性きの月鴛るまでに花と像るふ

謌一本
恒法ろ

ふるさとをあとやそのつまとおもふ人
陽明門院の姫ぎみ

ものをとあてやそのつまとおもふ人
まつひさる又の日花のをりなるを侍従ともも

新十 大宮前太政大臣家の会の題

とのゐ言る　　杜花

徒古今春下
後もふ詠る春のむかもたち

兼保三年中宮女房分草花日當とりふことを

見ル

よみ侍りるふ　　さ

花さそふまのゝへの苔のうへ

白のゆきく花と

こ風てまこ雨とまぬ

新後拾遺春下
雪のふれるかさいそのつひもとすす

前参議顕家

桜をよめる　　法性寺入道前太政大臣

前参議義長

新千載春下
もの

花のちるをよめる　　壬生忠岑

いくそうつろひぬるさくもあるらん

天徳四年内裏の

徒後拾遺春下
うら

まもの中て　　一品資子内親王

花作れ友とふる　　基俊

新後拾遺春下
ながもちよりかもとにてなのめ

新後拾遺春下
ものおもふ

新後撰春中
うのはなにてや桜のもとさそ

新後拾遺春下
ものおもふ

新後撰 花のちりけるところによめる

新後拾遺春下
ながもちよりかもとにてなのめ

永承
人の家にさくらもと風ふきめいまいりたりけるに

よみ人しらず
ものおもふ

続後撰春下
花の風

続後拾遺春下
ものおもふ

続後撰春中
うのはなにてや桜のもとさそ

続後拾遺春下
ものおもふ

続後撰 花のちりけるところによめる

新後拾遺春下
ながもちよりかもとにてなのめ

永承
人の家にさくらもと風ふきめいまいりたりけるに

よみ人しらず
ものおもふ

続後撰春下
花の風

続後拾遺春下
ものおもふ

続後撰 風宇治にて山家の花をよめる

続古今雑上
ふるさとのあれたるやどの桜もと風にしをれてとふ人もなし

続古今雑上
ふるさとのあれたるやどの桜もと風にしをれてとふ人もなし

風雅春下
白雲のやへにかさなるさくらさへ風にしをれてとふ人もなし

風雅春下
白雲のやへにかさなるさくらさへ風にしをれてとふ人もなし

太宰権帥経信
見てもまたあかぬ桜を春風のいたくな吹きそ花の盛りに

太宰権帥経信
見てもまたあかぬ桜を春風のいたくな吹きそ花の盛りに

法橋顕昭
春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり

法橋顕昭
春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

続千載春下

春ははやうつりにけれ色もなを
花のふるさとの松の緑

続後拾遺春下

木の本にたちよるかげもなかりせば
いかに桜を惜まざらまし

道淵

玉葉春下　も一本　そ一本　と三

ちるとてよそに帰る心は桜花
惜むにとまる風もありけり

小弐部内侍

新続古今春下

ふるさとは花こそ春の形見なれ
散ぬる後の香にぞ残れる

後鳥羽院御製

続後撰春中

つくしのやなぎ桜の井もありと
聞くもなつかしき春の色かな

太后宮大弐俊成

続千載春下

ちりくもるみよしのさくらもとの
花の雲なる春の曙

一品資子内親王

散ことのなどまつ桜もまれなるや
長治二年壬二月中宮の次つよみ侍る

中宮内大(右玉)

九重にふりつもるとや春ごとに
花のとしくる

太宰権帥経信

同春下

春風ののどけき日とをそなをも
花をそちるる

神祇伯顕仲

玉葉雜上
そらかもちるかとも
洞院攝政家百
ともと

續後撰春下
花の中
皇太后宮大夫俊成女

續古今春下
花の
鷹司院按察

新續古今春下
藤原雅経

南殿の
二條院三位内侍

此哥詞合共諸本无之以一本補之
續千載雜上
中務卿親王 昌平

風雜春下
藤原元善

風屋風のそよそよ
人をりふさくさのふ
のちるとそ

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

ふる雨のさむき風のそよめきそ
見花日當とよまんよりも
おもふ人ふきみだす花をうらめしく
秋にしらるゝ
きてみれとうつりもはてぬ菊の花
露宗于朝臣
ふるさとのかきねのすゝきほにいてゝ
大中臣能宣朝臣
いさこゝろしるやしらなみ吉野の
尾のあなたに雁なくなり
法三位隆祐
前大納言為家の家百首
蘭原信實朝臣
吹風とうつりもはてぬ菊の花
後京極攝政家六百番歌合
ふるさとの山路をおもひやるにも
袖の露をば
野長明
ふるき本のこゝろの格もしらぬをもてなして
堀河院鳥羽殿にて行幸の日沢の花をとゝ
權大納言

かうたてまつりけるそのつぎでにおなじ
おなじ
新後拾遺春下 藤原実方朝臣
くるまあくるみてをめぐる沢水も
立十そ日ぬる中ふ 後鳥羽院御製
徒千載春下
花ちりて志のの小てふ
百首の中ふ
新千載春下
おもふことも多のふのさくらかな
惜もとまらぬ
刑部ゝ範兼
ちりぬへきほとをまちえてさくらはな
祐挙法師

右諸本

なくさまる事なくてとしをへにけること
仁和寺入道二品親王 守覚
慈鎮大僧正
ちはやふる神のいかきもこえぬへし
三条右大臣の家にて
中納言兼輔
まちわひぬ君をし恨ん秋の夜を
長しとやみる人のつらさを

挿春

花ゆゑもろともおもふ春ごとに人の別れを惜む使ひの任

藤原(とう)

あさましやうきものとのみ思ひそめて人の心の深き隔てを

社頭のもみぢ

かぎりあれば風にまかせて散る紅葉神のつまでや色深からん

依花待人

散ぬ間に門院大輔

新千載春下

人よりもまづ知りそめし花の色を心にかけて待つ身ともがな

続後拾遺春下

ふるさとの花のたよりも絶えはてて春の夢路に匂ふ軒端を

寄花恋

源師光

おもひのみ花をもえこそ結ばねど春の夢路に匂ふ軒端を

洞院摂政家百首

九条内大臣

続後撰春下

ちりまがふ木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける

百首歌中

宮内卿

続後拾 久安六年
崇徳院御百首
ちまりくさくさ

続後撰春下
まてゝふくさてゝこゝちもめ桜もをまゝくまゝとゝゝて
大炊御門右大臣

続後拾遺春下
花のちるらいまのてくまゝゝ
ゆふ日影おしみ
まてあかしもなくやつきぬ人おをと
月おしよ花そゝゝくらるゝ
玉葉春下
さくもをゝゝ
後冷泉院御製

玉葉春下
まのゝかをめる
新後拾遺春下
ちらのゝ
新後拾
ゝゝ
と同上
正治御百首
後鳥羽院御製

桜もちるのまゝひなる日ゝくまゝゝ
右大臣の御百首の内
玉葉春下
さゝ
入道前太政大臣

続後撰春下

ゆくとふる跡とつつまで花もを

同春下　郁芳門院安藝

こかくれて桜もちるよ峯の

落花随風

詠てそとをきの苔のそこをを

いつとなく春もと　一本

みてそふもくやまて桜

待賢門院御

こかの一桜ちるめるを

詠合せる

続拾遺春下

初瀬のそのゝ清のまえて

建保二年一本　四年後鳥羽

百番の歌合の

前太政大臣　諸本後鳥羽

おく内裏詩哥合の上花を

前中納言定家

又同じ時のを

通諸本

ゆくへの法まてそ消てふを

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

小ゐてに花さくまでうぐひすの
　なくをきゝて
三葉春下　花をたゞたちぬさにせる山ぢには
　洞院摂政家百首
きてもみむおなじくのおる梅花
　袖にをれるは
　花をこそ　　一本　折之
雪ふれるたかねのさくらさきにけり
　藤原信実朝臣
ふるのたもとくちてほすまに
　前恒
うつろはむものともしらで咲きそめし
　風をうらむる花のしたかな

もとをしと見し
ちるさくらなほめもやらぬ夕暮に
　待賢門院堀河
久安百首
ちぢのうつろふまでもむすばれし
　秋の神垣
　　和歌所
折しらぬ
はつ茅原みどりにいるる里ながめ
　　諸本　そよ
ふきてかへるいくかへりしも摘んな
　久安内大臣
摘人を神のまにまにおもふらむ
　堀河院御時百首
春日野の若菜
　太皇大后宮大弐

（七 諸本）

前中納言定家

続後拾遺春下

（もゆ 続後拾）

（もゆ 一本）

藤原経衡

好古

（もゆ 一本）

続後拾遺春下

藤原惟成

（五）

風 来雁院後庭風のもる池のかゝみのとゐつゝくもりなき夜もまどおそくさえわたるころ

題しらず

忠見

（そ 諸本）

（ゝ 同上）

元真

風雅春下

（ゝゝゝゝ 同上）

（八風）

さうき

民部卿成範

皇太后宮大夫俊成

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2　　ガラス使用

まてこぬくらんはるの神もいのまつ事や
六帖 影守中よ　前大納言為家
天ちてをおるるうんちの風のみさそふ山ぬさのも
ちる花を
玉葉春下　薗壁門院大将
ちめてもむしろ人の旬ふてはるの夜のうれい
ふかき風もふらんふるのさくらもいまやちりぬる
中納言定家
ちる花を惜むこころやとめまし春
新恒

続拾遺春下
玉葉ちる井手のこの風やまぶくらん
堀河院御時ちる花を惜人の
左大臣
ちる花を惜人のそもるてふのさくらは今日可絶
後鳥羽院御製
ちらの池のまやめまもる杜もあれ人ふしれめちな
散花を
左を申ねる御

[illegible]

彰恒

[illegible]

雄宣親王

四條太皇太后宮下野
（その諸本もイ）

堀河院中將の後朱雀院の[illegible]

[illegible]

[illegible]

神祇伯顯仲

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三百六十そそぐ年ふ　好古

まつ風に成ゆくそらとそ花の雪

薄も　仙

ふくる雪かもる薄のもしの

池を　上一本

薄をそそ

徒後撰春下

いとそもめるまもる月

池と薄花　と　一本

池のそそのみとそそめる

正治ふそそ

三條入道左大臣

拾遺抄

従二位家隆

徒古今春下

ぬるとそそのそそむ　一本　徒古

後鳥羽院御製

よる物そくめもそんそのあそそ

後深性入道前太政大臣

ここの本ふそくかふもそまそ

後撰春下

まそふそいそのそみ来る　ん本

二條院讃岐

拾遺抄

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

[illegible]

禖子内親王家式部

いつかまた[illegible]桜この一枝を折らざらまし

[illegible]

西行法師

[illegible]

千五百番歌合

[illegible]

後鳥羽院御製

[illegible]

前大納言隆房

[illegible]

正治百首

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]と諸本

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大信敦永起

[illegible]

永享の節

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

身をつくし恨ながらもあるものを
三月尽のこころを
風のさそふ花よりさきにうつりなば
常泉院内大臣
人ならぬ水にもさらめやは
天治四年内裏歌合
後三條院
花ちらぬ春にもあるかな
中納言資方

後三條院六条
くもるよもまだよもやふけぬらん
洞院摂政家百首
かきまぜて雪にもの思ふ夜半の袖
建保四年院歌
浪立ぬ二位家隆
結縁經歌
花ゆゑの心多き身の名残まで
右兵衛督基氏

続後撰雑上

いそのかみふるのなかみちゆきふりてあとたえにしをいかにとはまし

正三位知家

続古今雑上

このまつのこころ料やこころこそまつらめと答へたる

ためしなきものとけるはまつとしもいはれざりけり

ナ将内侍

いつもせんさおく（一本お）ぬさもおのつからふまで別のまつの名ぞおしき

久まで百首

藤原雪直通重男

おのが身に言ふことまでもとりまぜて文もこんまでをなみぬるかな

後京極摂政太政大臣

百首歌の中に

ふるまつの別のこころ忘れねばてのこもとにぬるふこの事

（裏）

続後撰雑上

いそのかみふるのなかみちゆきふりてあとたえにしをいかにとはまし

続古今雑上

このまつのこころ料やこころこそまつらめと答へたる

ためしなきものとけるはまつとしもいはれざりけり

風雅春下

十つもとのこめのいねるもおとこ（凡諸本一本なし）

貫之

三月晦を

延喜御時よみこ（凡）

桜も散りぬ時ぞうれもの別の雪のふりてまつ

過ぐるをとしめおやこに花山院御製

三月晦のこころを

をしめともいかでかとまるものなれば今日をかぎりの春

中納言定頼女

過ぐるをとしめおやこに花山院御製

三月晦のこころを

をしめともいかでかとまるものなれば今日をかぎりの春

117
105
2

新後拾遺春下
つもくと 新後拾

あるもとく花をみてこそ

ふるさとのあるじとなるも

さそふ水のみの

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』請求記号 117-2
ガラス使用